
TOP SPEED

東真明良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TOP SPEED

【Nコード】

N5645E

【作者名】

東真明良

【あらすじ】

主人公、槻丘瞬つきおかしゅんがお送りする単純な学園&野球？もの。最初は野球部になど入る気など全くなかった主人公だがなぜか気づけば野球部に・・・

プロローグ（１）

“ いいな、あの選手。うちにほしいな ”

夏——、軟式野球大会での槻丘^{つきおか} 瞬^{しゅん}をみて、

神奈川県立新東高等学校主将、龍尾^{たつお} 夏喜^{なつき}はそう言った。

・・・・・・。

< 龍尾 夏喜 Side >

あの夏、最高気温41 の猛暑。

日本がついに熱帯地帯へと進化をとげたのかと思えた日である。

こんな日々の中、球児たちは軟式野球大会の頂点を決めるための試合が始めまるうとしていた。

「おい、夏喜、こつちだ」

そう龍尾 夏喜に呼びかけるのは上山^{かみやま} 鷹^{たか}。

新東の3番ライト（予定）、中・長距離砲である。

「お疲れ、席確保せんきゅう」

調子よくそう言って上山のいる席の横へと腰を下ろす。

とりあえず組み合わせが気になるので聞いてみることにした。

「一回戦は？」

「活三大付属とひよこ岳中だ」

おおっ、いきなり前年度優勝というか常連の活三大付属がトップか。

対するひよこ岳はまったくもって聞いたことがない。

ていつかひよこってなに、かつこいいの？つよいの？

名前でもう開始ゴングと同時にせーむ・しゅ。との後ろ回しが見事に決まりましたね。

とまあ意味不明な御託はどうでもいいとして・・・

「とりあえず活三大付属の大崎は見とこう。試合終わったら声かける」

「大崎か。声かけるかどうかはおいとして、確かに中学離れたあの速球はすげえな、130後半は常に出てる」

「あと何気にバッティングもいいぜ？」

「だな、大きな身体に似合わず柔軟な・・・お？そろそろか」

・・・

「ただいまより、第一回戦、活三山大学付属中学対ひよこ岳中学との試合を開始します」

・・・

と議論をしている間にアナウンスが流れた。

礼！！という主審の声が聞こえる。

「始まったな、さっそくひよこの攻撃か」

そうか、ひよこの攻撃か、うん。めっちゃ弱そうだ（名前的にも）。

「ま、じっくり観戦しますか」

・・・。。

プロローグ（２）（前書き）

「いいな、あの選手。うちにほしいな」

夏——、軟式野球大会での第一試合。

活三山大付属とひよこ岳中との試合をみて龍尾 夏喜はそう言った。

・・・。

まあ結果的には４－１で活三山が苦戦しつつも勝利なわけだが、いかんせんただの苦戦ではなかった。

上山 鷹と龍尾 夏喜はあまりの予想を超えた結果に驚いた。

いや、多分ここにいる観衆のほとんどが二人と同じ考えだろう。

あの常勝学校とも言われる活三山大付属が——、

全く無名のチームの投手に７回１４奪三振を喰らうなど思ってもみなかった——、

<槻丘 瞬 Side>

“ はあっ・・・はあっ・・・ ”

回は7回の裏、1 - 1。無死一、二塁で活三山の攻撃。

バッターはこの場面で四番、大崎ときたか。

どうも野球の神様とやはら生意気にも出てきた初出場校には勝ってほしくないらしい。

・・・ランナー二人は一人が振り逃げでもう一人がセカンドのエラ
！。

ここまで球数100球。

精神的にも体力的にもそろそろ限界だ。

「 ったく無茶な注文しやがる 」

独り言を呟きながらもセットポジションからの投球。

一球目に投じた外角ギリギリの球は見送って1ストライクとなった。

「 ふう・・・ 」

思わず一息もらす。

呼吸すらしんどくなってきた。

早々と二球目。

——ギンッ。

鈍い音。

「おいおいマジかよ・・・」

相手の打者の手元にえぐりこんだ俺の自慢のスライダーは危うくライトにスタンドインするところだった。

なんて力してやがる。

こいつはもうドーピング疑惑で退場決定だろう。。。

遊び球を使う余力はない、故の三球勝負。

ビシュッ

三球目を投じる。

内角低めの決め球、大きく縦に割れるカーブ。

ブオン。ットライーク、バッターアウト!!

「はあ、はあ・・・っし!」

三振した四番打者はバットを地面にたたきつけ悔しがる。

ざまあみるエリートやろつめが。

さてこれで1アウトだ。

1 - 1、一死一、二塁。

ピンチにはなんら変わりはない。

そう、変わりはなかったのだが・・・。

俺はこの四番との勝負で完全に思考回路を麻痺するまで燃やしていたらしく――、

キーン

次のことなど全く考えずに簡単に投じた一球が――、

あ、ホームランか。

ウワアアアアアアア。とざわめく観衆。

なぜかぐつたりとマウンドに膝をつく俺。

糸が切れるとはこのことだったのだろう・・・。

なにもかもがどうでもよくなった。

そう・・・俺の中で、何かどうでもよくなったんだ・・・。

・・・。。

。こうして俺の中学最後の軟式野球大会は幕を閉じたのであった・・・

ブログ（2）

“いいな、あの選手。うちにほしいな”

夏——、軟式野球大会での槻丘^{つきおか} 瞬^{しゅん}をみて、

神奈川県立新東高等学校主将、龍尾^{たつお} 夏喜^{なつき}はそう言った。

.....。

<龍尾 夏喜 Side>

あの夏、最高気温41 の猛暑。

日本がついに熱帯地帯へと進化をとげたのかと思えた日である。

こんな日々の中、球児たちは軟式野球大会の頂点を決めるための試合が始まるうとしていた。

「おい、夏喜、こつちだ」

そう龍尾 夏喜に呼びかけるのは上山^{かみやま} 鷹^{たか}。

新東の3番ライト（予定）、中・長距離砲である。

「お疲れ、席確保せんきゅう」

調子よくそう言って上山のいる席の横へと腰を下ろす。

とりあえず組み合わせが気になるので聞いてみることにした。

「一回戦は？」

「活三大付属とひよこ岳中だ」

おおっ、いきなり前年度優勝というか常連の活三大付属がトップか。

対するひよこ岳はまったくもって聞いたことがない。

ていうかひよこってなに、かつこいいの？つよいの？

名前でもう開始ゴングと同時にせーむ・しゅ。との後ろ回しが見事に決まりましたね。

まあそれはいいとして・・・

「とりあえず活三大付属の大崎は見とこう。試合終わったら声かける」

「大崎か。声かけるかどうかはおいというて、確かに中学離れたあの速球はすげえな、130後半は常に出てる」

「あと何気にバッティングもいいぜ？」

「だな、大きな身体に似合わず柔軟な・・・お？そろそろか」

・・・

「ただいまより、第一回戦、活三山大学付属中学対ひよこ岳中学との試合を開始します」

・・・

と議論をしている間にアナウンスが流れた。

礼！！という主審の声が聞こえる。

「始まったな、さっそくひよこの攻撃か」

そうか、ひよこの攻撃か、うん。めっちゃ弱そうだ（名前的にも）。

「ま、じっくり観戦しますか」

・・・。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5645e/>

TOP SPEED

2010年11月26日12時54分発行